

学校の内と外—何が課題か

静岡大学助教授 馬 居 政 幸

一 学校はどうなるの

①「お父さん、来年からキャンプがなくなるって本当なの。ディズニールランドにもいけなくなるの。」

②「土曜日学校がないのはいいけど、その分、宿泊訓練や修学旅行がなくなって、毎日勉強ばかりでは子どもたちがかわいそうね。」

③「先生も週休二日にしたいでしょうけど……でも土曜日休みでない人も多いのよ。それに塾がふえなにかしら。非行も心配だし……。」

これらはいずれも最近、学校五日制に関して私に聞かれた問いです。①は小学校四年の娘が友達に聞いたことで、夕食時に質問してきたものです。②は横で聞いていた妻の補足説明です。同じ情報が妻の耳

にも入っていたようです。③はある地域でのお母さん方との家庭教育の懇談会で出された質問です。

娘と妻の心配は、休みが二日になるのはよいが、そのために土曜日の授業時間が他の曜日に移って多様な活動の余裕がなくなり、かえって子どもも教師も忙しくなる、という「うわさ」に基づくものでした。③の母親は土曜日に子どもが学校に行かないと「おこるかもしれない（おこるはず？）」ことを心配しての質問でした。教師が二日休むことへの感情的な反発も少しあるようです。どうも学校五日制は、学校や教師の意図とはかわりなく、既にさまざまな憶測をとまなつて母親のネットワークの中を流れているようです。

このような問いに私は正直いってとまどいました。しかし、だんだんとこれは学校と家庭を変えるチャン

スかなと思うようになりました。理由は二つです。

一つは、問いの根拠が「うわさ」や「おこるかもしれない」ことである以上、どう答えてよいかとまどいました。少なくとも私の知る限り、五日制への課題は様々に検討されていても、そのシナリオはまだ確定していないはず。でもそれは、今は誰でも「自分のプラン」をたてられる、ということでもあります。学校五日制は、学校や子どもの課題を一般論や教師の問題として他人事のように議論するのではなく、自分の問題として一人ひとりが考え始める契機になりつつある、これが質問を受けた私の実感（希望的？）です。

二つは、私の妻も含めて親（特に母親）の関心の高さにとまどいました。娘の疑問が友達からの情報であることから、子どもの関心の高さも加えるべきかもしれません。事実に行方して「うわさ」が広がり、不確かな「おこるかもしれない」ことに心配する。このことは、学校五日制への移行が学校（教師）や家庭（父母）の問題にとどまらず、広く現代日本の人を教育育てる社会システム全体の改変にかかわる課題であることを示唆していると考えます。さらに関心の高さは、システム改変へのエネルギーの高さを暗示しているのではないでしょう。か。うわさ」を支えるのは事実の

上での正しさではなく、実際に「おこるかもしれない」と信じる意識の強さだからです。「うわさ」が広がる

ということは、それだけ家庭や社会の側に五日制へのエネルギーが充満しつつある兆候だと考えます。ただし問題はその方向。今は変化を危惧する方を向いています。それを新たな人を教育育てる社会システム創造のエネルギーにいかにか転換・収斂するか。

そのためのポイントは二つあると考えます。

二 学校五日制は何のため

一つは、学校五日制の議論の発端は労働時間短縮の問題であることを忘れないように、ということ。今、世界に対する責任として、日本の社会全体が取り組むべき最も大きな課題の一つが労働時間の短縮です。ここでその背景や理由を詳論する余裕はありませんが、少なくとも学校五日制は、教育問題ではなく、社会全体を週休二日制にする過程で生じた労働問題です。ただし、それは教師も他の職業と同様に週休二日にすればよいということではありません。労働時間短縮により日本の社会が問われる課題とは、単に働く時間を短くすることではなく、働くことの意味やその前提にある一人ひとりの生活や家庭のあり方です。

敗戦後、平和で豊かな社会をつくるために、家族、とりわけ子どもに二度とひどい思いをさせないために懸命に働いてきたのが日本の多くのお父さんやお母さんでした。学校と教師は親の期待に応えて一生懸命勉強することを子ども達に教えました。両親が働くために鍵っ子が問題になれば放課後も面倒をみました。健全に育てるために学校を出てパトロールを行い、土曜どころか日曜も出勤して部活に取り組みました。社会全体が学校に子どもをまかせて働き続けました。それがいつしか自己目的化し、働くことにしか自分を見出せない多くの大人と、学校の成績でしか人間を評価できない社会システムをつくる結果になっていないでしょうか。その代償が一人当たりのGNP世界第一位という経済大国日本の姿ではないでしょうか。

豊かさを求める社会の仕組みと人の生き方は、豊かさを生かすためには不適切かもしれません。労働時間短縮はこのような日本の働き方や社会システムを改変するための方法の一つであるわけです。学校五日制の課題は、教師のみでなく親も地域の人も含めた全ての大人の労働時間短縮を視野において、人としての生き方、あるいは人を教える方法と仕組みを改めて創造しなおすことにあると考えます。

三 学校五日制をスタートさせるための課題は

冒頭で紹介した問いが示すように、五日制への課題は二つあるようです。一つは学校の中の問題。五日間の教育内容をどうするかという問題です。娘と妻の疑問です。六日を五日に圧縮するだけでは解決しないことは指摘しました。当然、教育内容の精選が課題になります。そのためには、まず、授業時数を問う前に、これまでの学校教育の内容をトータルに問い直すこと。これからの社会で学校が担う課題を改めて把握し、新たな学校教育のあり方を親や地域、とりわけ子ども自身に提起することです。教師のみでなく子どもと親と地域の人達が、共に創造する学校、これが五日制の最も重要な意義だと考えます。家庭や地域の課題は二日ではなく五日にこそ問うべきです。

さらに、新たな学校教育の方向は新しい学習指導要領や学習指導要録の生かし方次第、ということです。小学校の生活科や中学校の選択教科、授業時間の弾力化、体験学習や課題学習の重視、小学校低学年の評定の廃止、子ども個々の学びを重視する観点別評価、そして「各学校で」と教育課程のあり方を総則の最初に示し、「開かれた学校」を提起した意義は大きいと考

そしてその必然として、二つ目のポイントは、学校五日制は「日本社会における人を教えるシステム」のトータルな改変へのスタート」ということです。六日間で行っている学校教育を五日間に詰め込むだけでは何の問題解決にもなりません。五日制の論議は、学校や家庭や地域のみでなく、公的機関や施設や企業等を含めた、子どもと親（保護者）がかかわる世界の全てを当事者として進める必要があります。学校五日制の成否の鍵は、学校（教師）の努力は当然として、親も子どもも含めた社会全体の納得と智慧を総合することができると考えます。

もちろん、このようなことが急にできるわけではありません。「スタート」とする理由です。しかし考えてみてください。昭和二十二年に新学制が施行された時、現在の学校の状況を想像した人はいたでしょうか。それから四十年以上をかけてつくったシステムが、今、問われているわけです。ただし、それは学校が問題だからではなく、学校とりわけ教師が優れていた故に生じた問題であることを強調しなければなりません。もっともそれだけに変えるためには大変な努力が必要です。まずスタートすることが必要です。そのために解決しなければならぬ課題に目を向けたいと思います。

えます。いずれも、教室で教師が黒板を背に教科書を教えるという形態のみでは実践できないはずで

教科の授業時数の確保のためにキャンプをなくすのではなく、教科の教育を豊かにするためにこそキャンプは必要です。教室だけが教科の時間としてカウントする場でも時間でもありません。多様な活動を切り捨てて教科の学習時間を確保するのではなく、教科の学習自体の中に多様な学習の可能性を求めるべきです。

「各学校」の特色を生かし、子どもとその生活に即した教育課程と教育実践をいかに創造するか。そのためには家庭や地域の協力が重要です。先に五日にこそ家庭と地域の課題があるとした理由です。

二つ目の問題は学校の外のいわゆる受け皿問題です。地域のお母さんの疑問です。しかし、私はこの問いにどうしてもなじみません。善意は認めますが、土曜日に学校にいかなければ、土曜日に面倒をみる大人がいなければ、子どもは必ず悪くなることを前提とした問いだからです。それほど学校の外は悪に満ち、子どもは弱く、逆に大人は立派で、学校は優れているのでしょうか。また子どもといっても小学生と中学生では全く異なり、まして高校生の場合はどうでしょうか。

子どもを保護する発想や大人の都合にあわせての健

全育成ではなく、子どもたちが互いに自立した一人の人間として「教養・学び育ちあう」ために何が必要か。これが今最も必要な視点と考えます。

四 子ども自身の世界の創造を

学校の中では子どもは常に先生の指導のもとで児童・生徒の役割を演じなければなりません。しかし、子どもは教師と異なり学校を出て生きていかなければならず、児童・生徒と一人の社会人として必要な技能や態度は異なるはず。子ども会もスポーツクラブも学校をモデルにする限り問題は同じです。他方、小さく私事化した家庭で子どもの社会性を育てることは困難でしょう。私達は子どものためという大義名分により、子ども自身の世界を次々に破壊し、学校の塀の中に子どもを閉じ込めていないでしょうか。そろそろ子ども達に彼らや彼女たち自身の世界を返す時期に来ていると思います。学校五日制はそのチャンスです。

大人が用意した既存の秩序に素直に従うことは自立でも自律でもありません。リスクを承知で自ら生きる世界を創造することによってしか本当の自立はなく、時代の変化は過去への適応ではなく未来を創造する人間を必要としています。子どもの未来は親や教師でな

く子ども自身が創造するのです。だれも責任をとれないはず。そのために何が必要か。まず、子どもを受け取る組織より子どもが安心して遊び回れる時間と空間です。親は子どもが生活する場を歩き、現場に即して自分の子どもの成長に応じた環境を考えてください。低学年の子どもと高学年の子どもでは危険度は全く異なり、大人へのあがきを始めた中学生と自分なりに生き方を創造しなければならぬ高校生ではその生活の範囲も環境の意味も異なります。危険を防ぐために危険な要因を取り除くことによって育てる時代は終わりました。選択できる力と選択した結果に対する責任の取り方を教えることが重要です。塾の問題も同じです。教師にとって必要なのは、職場ではなく生活の場の学区で活躍することです。教師の顔ではなく、人の親の顔、地域のおじさんやおばさんの顔で子どもの生きる場の創造の担い手になってください。子どもや親への要求を自ら生活の場で実現してください。子どもと親への不満を地域の生活者の目で見直してください。地域はさまざまな人の集まりです。それらの人と人間（あいだ）で新たな自分を創造してください。それが学校の教師としての自分を豊かにするはずです。これが教師こそ週休二日でなければならない理由です。

論文3

地域の生涯学習の観点から

元・清水市文化センター長

西ヶ谷 悟

はじめに

週休二日制の普及と拡大が進む中で、学校五日制が時代の要請となっている。

学校五日制の問題は単に学校を週休二日にするという時間的な問題だけではない。それは社会の変化に対応した新しい学校教育のあり方と、二十一世紀からの留学生である子どもたちの育て方にかかわる問題であるとともに、経済的豊かさの追求に特化してきた物質至上の価値観と、その延長上にある家庭・地域を含めた社会全体のあり方、そしてそこに生きる私たちの生

き方を根底から問い直すことでなければならない。とすれば、私たちはこれを前向き・積極的に受けとめて地域における生涯学習の観点から、家庭・学校・地域全体の教育力（人間形成機能）の回復と創造の問題として考えていきたい。

「三過ぎ」の是正

「成長はもはや進歩ではない」という価値観が国際的な合意となって、社会はいま「ゆとり」と「安定」をキーワードにして大きく動き出している。

ところで、ゆとりと安定を確保する大きな決め手と

教師の広場 季刊 89号 1994/4 もくじ

随想 提言シリーズ⑦

「よく学びよく学べの教育」から「よく学びよく遊べの教育」へ

元・静岡県立清水西高等学校校長 東海大学短期大学部講師 飯田 義人 4

論文1

学校五日制と学校の役割

静岡大学教授 深谷 昌志 7

論文2

学校の内外へ何が課題か

静岡大学助教授 馬居 政幸 12

論文3

地域の生涯学習の観点から

元・清水市文化センター長 西ヶ谷 悟 17

座談会 学校五日制について考える

司会

静岡県立南部小学校校長

望月不二夫

出席者

静岡県教育振興協会副理事長
前・浜松市立東部中学校校長

山下 好雄

浜北市立鹿玉小学校校長

土屋 正和

静岡大学教育学部附属静岡中学校PTA副会長
沼津市立今沢中学校PTA母親代表・研修部長

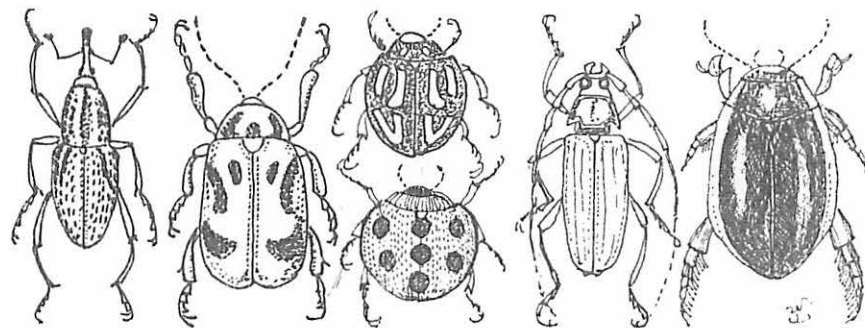
吉野 台二
増田 悦男
赤堀 典子

特集・学校五日制について考える

アンケート100人の考え方

わたしの失敗

県内小・中・高校教諭 34



平成二年度「静岡県教育研究奨励賞」入賞作

自ら学ぶ子を育成するために——「開かれた学校」を目指す取り組みの中で

袋井市立袋井北小学校教諭 高木ひで子 大橋弘明 鈴木孝子 磯部安 38

移行期における技術家庭科「食物」領域の授業——創造力を生かす活力ある

御殿場市立南中学校教諭 上村士守江 42

新学習指導要領と美術科の課題

静岡県立浜松湖南高等学校教諭 大石 倍二 46

「ロマンを求める生活科」単元づくり

静岡市立安東小学校教諭 奥村 保子 50

「第二十一回静岡県教職員芸術祭」文芸部門 童話・童謡

きじのおかあさん(童謡)

退職互助部(清庵) 望月 豊吉 54

子だめきボンタとかざぐるま(童謡)

三島市立山田小学校教諭 服部 静子 56

ゆうたくん(童謡)

退職互助部(三島) 山口 当子 59

風の子ウィンとおばあさん(童謡)

退職互助部(小笠) 松井 雅子 65

童話・童謡選評 初心にもどって挑戦を

前・三島市立錦田小学校校長 中尾 勇 77

◆ 新刊紹介 成瀬己巳男著「石に立つ矢」

前・沼津市立第四中学校校長 勝又 典男 79

◆ 表紙絵によせて 空の青さにあこがれて

浜松市立北部中学校教諭 小楠 和子 78

◆ 現代教育事情①・②・③

わたしたちの作品 Let's search for tomorrow 伊東市立門野中学校

49・64・75

カット とびら 三津山 繁 静岡市立一番町小学校校長

もくじ 大場 岱介 沼津市立大平中学校教頭

